

図書館通信 — 3 —

1970.5

新入学生を迎えて

附属図書館長 天野佳人

わが学園はいま光まばゆく、学年初めの若やいだぞよめきの中にあります。わたくしは、附属図書館の責任者として、新学年を迎えた学生諸君に対し、図書館の運営について、所信の一端をお伝えしたいと考えますが、それに先立ってまず新入学生諸君に心からなる祝意を表します。新入学生諸君は、入学式に引きつづき、ガイダンスを受けて、いよいよ教育を受けることとなります。

そこで大学の教育における大学図書館の役割について一言触れつつ、わが図書館の輪郭をお伝えして置きたい。いうまでもなく、大学は研究と教育の場であります。したがって、大学では知識欲に燃える学生がひたむきな研究者たる教官より最高の水準の教育を受けるのが本来の姿であります。教育を受けるといっても、学生は常に受身であるべきではなく、積極的に自主的に教官の指導を得つつ、真理の探求に没頭することを意味します。大学図書館は、そのような大学の目的に副って設けられた施設でありまして、大学の研究と教育に対して、そのための素材的基礎を提供する処であります。したがって、図書館の利用なくしては大学での勉学は考えられません。

さて本学の附属図書館のことに移りますと、それには静岡片山の本館の他に浜松分館・農学部分館が含まれているわけですが、唯今は本館についてのみ触れることに致します。本館は昭和43年5月に竣工した近代的設備の図書館であります。閲覧室は快適ですし機能的には幾多の長所を備えています。特に良い点は、本館の建っている位置が各学部を中心にあることです。これは本学の片山移転に際して、図書館を全学の心臓たらしめようとの本学の構想によるもので、他大学に対しても大いに誇るに足るものといえましょう。本館の蔵書数は現在約18万冊で、これはまだまだ不十分な数であります。充実は今後を期さねばなりません。図書は開架式図書と出納式図書に分れています。開架図書は現在約2万冊でまだ決して十分とはいえません。図書館では可能な限り書庫から出して開架をふやして行く方針であります。そして近い将来には3万冊位にして行く考えであります。出納式図書の貸出制度もありますので、各自おっくうがらず目録カードを引いて、求める書籍を探し出して閲覧をのぞみます。なお本学では指定図書制度が実施されています。この制度は、昭和43年度・44年度の両年度文部省より約1,000万円の子算がおりて実施され、現在一般開架図書とは別に13,000冊収まっています。これは講義と直結した必読書です。同一書籍が何冊か揃っていますから、一時に数人乃至十数人が閲覧できる仕組みになっています。

終りに、わたくしがサービスの面で懸案としてかかえ、何とか改善していきたいと考えている問題の二三について申し添えたい。それは開館時間の延長です。現在の開館時間では、講義が午前午後ぎっしり詰っているため、図書館を利用する時間が極めて少ないという欠陥があります。わたくしは、学生の要望にこたえて、通常時も開館時間の延長ができるよう懸命の努力をして行きます。次はレファレンス・ワーク（参考業務）の拡充です。このたび専任の職員を配置して、活発にこの業務をすることにしたので、学生諸君も大いに利用して下さい。また本年度からは文献の複写業務にも一段と力を入れる考えであります。その他図書館の機能が十二分に発揮できるよう工夫努力を続けますが、学生諸君も図書館を身近な存在として親しみなされるよう切に希望します。

イギリス人と図書館

杉山忠平

いまでもわたしの思いだすことの一つはロンドンの通勤電車の車内風景である。当節の日本でなら、乗客の読みものとしては、さしづめ、スポーツ新聞や週刊誌の類が圧倒的多数であろう。それにひきかえ、ロンドンでは単行書を読むひとが意外におおかった。最初のイギリス生活当時に気づいたことであるが、数年後の二度目の滞在のときにも事情が変わっていないことをわたしはみいだした。

わたしの一友人も同じことに気づいたとみえ、いささか感慨ぶかげに、戦前の日本と同じだと評したものである。なるほど、そういわれてみると、たしかに戦前・戦中の山の手線や中央線のみみた車内風景に似ているようである。ただ、本の種類の異同は知るよしもないので別とすれば、わたしの気づいたところでは、ロンドンの乗客の読む本がしばしば公共図書館の本だということが違っている。それらの本は、たぶんまちがいなく、それぞれの乗客の近隣の公共図書館のものである。つまり、それほど住民と公共図書館との関係は密接なのである。

どんな地方都市でも、図書館のない市民生活は考えられない。小都市なら、町の中心部に、かならず市役所ないし町役場や教区教会とともに、市立ないし町立の図書館がおかれている。住民にとって中心部がもっとも便利だという自明の理由からである。独自の図書館をもてないほど財政規模の小さな町村なら、県立の図書センターがやはり便利な場所にある。小学校や役場や教会がそれにあてられることがおおい。むろん移動図書館である。大都市なら中心部に中央図書館があり、各地区に地区別の公共図書館がある。わたしの住んだマンチェスターでいえば、市の中心のセント・ピーター広場に面して中央図書館があり、わたしは所属の大学の図書館よりはこの図書館に通う方がおおかったほど質のたかい蔵書をもっている。おなじくわたしの住んだロンドンでいえば、中心部のウェストミンスターに量質ともに有名なウェストミンスター中央図書館がある。

一般住民は、よほど調べごとでもないかぎり、

中央図書館へいくことはない。居住地域の公共図書館でことたりる。それらは住民だれもが散歩でいける範囲にあるとってよほど数多い。そこでは住所氏名を無料で登録するだけで閲覧券が発行され、いつでも無料で本やレコードを借りだすことができる。むろん相互貸与制度が発達しているから、そこにはない本でも、貴重書やレファレンスものでないかぎり、無料で他の図書館からとりよせてくれる。

公共図書館の普及率は数字でも証明されている。わたしの手もとにある資料は少々ふるくなったが、それでも、総人口約5,200万のうち公共図書館サービスをもたない人口はウェイルズの一地方都市の約3万人にすぎない。かりにこの地区にもその後図書館ができていくとするなら、イギリスのすべての住民が公共図書館サービスによってカバーされていることになる。

こうした実績はもちろん一朝一夕になったものではない。だが、そのイギリスでさえ、図書館の歴史は長いものではない。なかにはマンチェスターのチェタム図書館——エンゲルスも利用した図書館——のように17世紀前半にさかのぼるものもあるが、歴史は大体において19世紀以降、とくに1850年の公共図書館法以降のことである。20年後、つまり初等教育法が成立した1870年でも、公共図書館をもつ都市は35にすぎなかった。教育の普及、したがって文盲率の減少に比例して公共図書館もまた普及したわけである。1870年といえば、中等階級の地位の確立、各種の労働者教育運動の経験を生んだ産業革命後の時代であるのに、文盲率は人口の4分の1におよんでいたというから、その後の1世紀が公共図書館の今日の普及を達成したのである。

その1870年は、日本では、ほぼ明治維新のころである。当時の日本の文盲率ははるかに高かったであろうが、それだけにその後の教育普及のテンポは日本の方が急速だったといえよう。ところが日本では教育の普及はけっして公共図書館の普及を生まなかった。イギリスでは津々浦々にいたるまで住民が図書館サービスへの自由かつ容易な

接近を享受しているのに、おなじ1世紀後の日本では、たとえば、人口じつに数十万の静岡市でも、中央の市立図書館をさえ、つい数カ月まえでもたなかったのである。地域図書館はいうもおろかであろう。これもまた日本における市民社会未成立の証拠であろうか。

イギリスの大学生による大学図書館の利用度が空席を見つけるのに難渋するほど高いのに、日本のそれが周知のように低いという相違には、いろいろな理由があろう。一つは大学生の質の差だということも否定できまい。一つにはまた、講義と図書館との関連での差があろう。入学時に学生が購入させられる部厚いカレンダー（ないしシラバス）にはすべての講義それぞれについて多数の必読文献があげられていて、講義は学生がそれらの本を読み、かつ理解していることを前提としてのみ進められる。だから学生はいやでも図書館で毎日の読書・研究にこれつとめないわけにはいかない。日本でこれをやらないのは大学と大学教師との怠慢もある。逆に、もしこれをやったら、はたして何割の学生がついていけるかという難問もある。つまり日本では、講義も試験も進級も教師と学生との暗黙の馴れあいでの存立しているのだといえるかもしれない。

だが、大学図書館の利用度の相違のもう一つの原因は、イギリス人が幼少時から公共図書館の利用の習慣をもっているのに、日本ではそうでないという点にあるとみてよかろう。日本では、中央・地方をつうじて、文化的生活環境への財政支出を不可欠視する政治のありかたが、これまでのところ、みられなかったし、また住民のがわの需要も、残念ながら、すくなかった。それは既存の図書館の利用状況にもあらわれているし、たとえばスポーツ紙と週刊誌に象徴されるような、また子どもから老人にいたるまでの日本特有のテレビ愛に象徴されるような生活状況からみるかぎり、この需要はここ当分顕在化しそうにもみえない。イギリスでわたしのよく接したのは、事務職員がお茶の時間に交替で食堂へたつとき、本を——おそらく図書館の本を——たずさえていき、ティーをすすするわずかな時間、読みさしのページを開いて読書するという姿であった。

（教育学部 教授 経済学）

■ 第3回指定図書制度運営委員会

昭和45年3月7日

於 本 館

- (1) 昭和44年度指定図書制度実施の経過報告。
指定図書の貸出期間の延長について、学生より要望があった旨、委員より報告があり、検討した結果、延長することを了承した。
- (2) アンケートの結果等からみても、指定図書制度の有効性が認められているので、逐年若干の補充更新を行なうことになった。
一般教養課程対象の指定図書の更新費と専門教育課程対象の新規購入費を合せて、最低100万円程度の予算計上が必要であろうということになった。
- (3) 指定図書実施委員会は廃止し、運営委員会は申し合わせ事項として、各学部・教養部選出の図書館委員が兼任し構成することになった。

■ 第1回図書館懇談会

昭和45年3月19日

於 本 館

図書館委員の代表と図書館員との懇談会がもたれた。

図書館は、大量の情報が生産され流通する、いわゆる「情報化時代」を迎えて、これらの情報をコンピューターの導入等の機械化により処理し、速やかに提供する情報センター的役割を果す必要が今後ますます強くなってくるし、また、そのように発展しなければならないだろう。そのため図書館はこの展望にたって、課題となっている現実的諸問題を片付けていくことである。

今後、この懇談会を継続させることに意見の一致をみた。

■ 附属図書館委員会委員

昭和45年度図書館委員は下記の通りです。

図書館長	天野 佳人	
人文学部	原 秀三郎	近 昭夫
教育学部	田中 鉄也	八木 達夫
理学部	森口 治生	長谷川園彦
工学部	市川 常男	横田 貞治
農学部	斎藤 全生	金兵 忠雄
教養部	増田 潔	植松 茂
電子研	武藤 時雄	豊田 耕一
局長	堀川 倉治	

私のすすめたい本

「多糖生化学」のことども

金 兵 忠 雄

多くの新入生諸君を迎えるに当って、ひと言われらの関係している農芸化学のことを述べ、それから筆者の担当している生物化学の参考書、最近発行された「多糖生化学(I)」(江上編、共立出版)の概要と、学習上おすすめしたい本の名を一通りあげてみよう。

農芸化学とは何か。一応、農学のなかで化学に関することだろう。面白そうだ、と入ってくる者のなかにもそんな疑問をもつものがあるかも知れない。今は園芸学科ができて、間違われることはなくなったが、以前は時に、「花を作るのが好きで」と受験してくる女子学生もいた。——因みに農芸とはお隣りの中国では日本という園芸を意味するそうである——また新しい林産学科(化学方面)との区別もさほど明らかでない。

日本の農芸化学は100年ほど前から、生物化学と共に発展してきた、と言ってよい。つまり広い意味の農業生物(動・植・微生物、それらの環境も含めて)を対象とする化学として、基礎と応用とが密に結んでいる。具体的には、土壌・肥料の化学から、かびや酵母など、微生物の働きの利用とその産物。それから一方、栄養・食品の化学や加工へと進み、近頃は生物・化学の発達につれて生物・化学工業への進展が著しい。このように二次(加工)産業の色が濃くなりつつある。

しかし古典的なヨーロッパでは依然として、農業の化学は土壌と肥料、それに家畜飼養を主体とする、近頃は農薬の問題も重要である、一次産業に限っているようである。

このような時にこの化学を学ぶにはどうしたらよいであろうか。第一には生物化学と有機化学の土台をしっかりと身につけることである。第二には実際に進む者には特に、化学として当然関係のある物理的なこと(物理化学)や化学工学(機械)的な概念をのみこんでおくことである。以上の2つが揃えば鬼に金棒である。

つぎに農学部(の)授業は、主に静的な部分を生物

化学として二年目の大部分の学生がきくことになり、もう一面の動的な生化学は、三年目に組み込まれている。(農芸化学に進む者は必須)

そこで多糖生化学であるが、ヤマタノオロチヤ多頭(議会)政治のような響きをもつ多糖は、地上の植物を通じてもっとも多いセルロースや、ムコ多糖(アミノ糖やウロン酸からなる、動物や微生物に含まれる)などの生体物質で、この本はIとIIに分かれ、Iが主に静的(化学編)で、IIは動的(生物編)でまだ出版されていない。

たん白質や核酸・酵素などの生体物質は生命に直接関係があり、実際食品・微生物などの仕事に応用の途が多く、勝れた本がどしどし現われている中に、糖質という割に顧られるところの少ない分野を取り扱った本書は光っている。560頁(A5判の本だから、値段も少しはるが(3,500円)、40近くの項目をそれぞれの権威が分担し、各多糖の性質から構造まで、さらに深く調べようとする者のためには文献も備えて、格好の参考書である。林産化学を学ばれる方にも、おそらく参考になるう。

終りに生物化学の一般に関する多くの本の中から、われらの直接参考になると思われるものを一部あげておこう。

- (1) 寺山「基礎生化学」(裳華)
- (2) 佐橋「生物化学大要」(養賢)
- (3) 江上「生化学」(岩波)
- (4) フェアリー著・鈴木旺ほか訳「生化学」(広川)
- (5) 佐竹「一般生物化学」(三共)
- (6) 江上ほか「生物化学」(朝倉)
- (7) 田中「生物化学の基礎」(大日本図書)
- (8) コン・スタンズ著 田中・八木訳「生化学」(東化同人)
- (9) ハロー・メザー著 西村訳「生化学入門」(上・下(技報))
- (10) 林・井上「農学における生物化学」(太洋)
- (11) ボナー著 山田・丸尾訳「植物生化学」(朝倉)
- (12) 山辺・寺山「生物物理化学の基礎」(朝倉)
- (13) 野村・北岡「生化学」(内田老鶴)
- (14) 寺岡・遠藤「新生化学ガイドブック」(南江)

(農学部 教授 生物化学)

「創造力」について

田中 順太郎

私の専門である有機合成化学の分野の研究では、かつては実験の連続で、肉体的労働を強いられることが多かった。学校を卒業して国立の研究所へ入った頃は、勤務中腰掛に坐ることも禁じられた思い出もある。ところが最近、機器の発達に伴い此分野も肉体的労働の部分は次第に機器に置き替り、研究方法が一変して来たのには今昔の感に絶えない。それと共に、頭脳活動の要求される創造力が非常に重要な部分を占めるようになって来た。尤もこの現象は、大なり小なりどの分野でも云えることであり、その為か最近、創造力並びにそれに関連したことについて、新聞、書物の中で我々の目にとまることが非常に多い。

その2・3をあげると、「創造性の問題は個人の問題であり、環境が支配する。特に重要なのは幼時の環境である。」これは最近の朝日新聞紙上に、今年三月退官された京都大学の湯川教授の述べられた言葉である。先生には、「創造的人間」などの著書があり、最近は、創造性について関心を持たれている模様である。大学紛争を契機に東工大教授を辞し、移動大学発起人代表として希望に燃えておられる川喜田氏は、「従来の教育は大切な創造的教育を一顧だにしなかった。真の教育者とは、他人の創造性を生かすと共に、自分も常に開拓創造者でなければなるまい。」と、これ又最近の新聞紙上で述べていられる。

又、工学部の学生諸君の先輩（浜松工専出身）である川上正光東工大教授も「若い人々よ、独創的であれ！その為には、ある程度の知識を獲得すること。それがほぼ完了したならば、それを捨てること。権威を信じ過ぎてはいけぬ。脚下を掘りたまえ、そこに泉が湧く。」と、最近の好著「一工学者のねがい」で述べられ、若い20代にこそクリエイティブ・パワーを培うことの必要性を強調していられる。

直接創造力について述べられたものではないが

大変示唆に富んだ書物として私が感激したものの一つに、寺田寅彦先生の「物理学序説」がある。終戦の翌年、未だ国民全体が虚脱状態にあった頃紙不足で粗末な書物しか店頭に無かった頃のある日、当時としては非常に豪華な博多織で装丁された小冊子が届けられた。送り主は、雪の研究で有名な中谷宇吉郎先生と相談され、手許にあった貴重な紙で約800部を、新生日本の糧として残す意味で作られたものであった。これは寺田先生の未完の書であるが、敗戦直後でもあり、非常な感銘をもって読んだものである。

創造力について書かれ、又その源泉となる書物は大変多い。もともとその素質があり、又は環境にめぐまれ、自とそなわってきている人には、あえてこの種の書物は必要ではないであろう。併し大方の学生諸君は、この種の書物の中で適当なものを選択して読書されることをお奨めする。創造性研究の専門家でない私は、自信をもってこの種の書物を推薦することは出来ないが、たまたま私の目にふれたもので、理科系学生諸君の興味を引きそうなものを拾ってみた。学生諸君のクリエイティブ・パワーを刺激することが出来れば幸いである。

- (1) 寺田寅彦 「物理学序説」
- (2) 湯川秀樹 「創造的人間」(筑摩書房)
- (3) 八杉龍一 「科学・創造・人間」(明治図書)
- (4) ラドウンスカヤ 「狂気と創造性」(ラテイス刊)
- (5) ハンス・セリエ 「夢から発見へ」(ラテイス刊)
- (6) ビバリッジ 「科学研究の態度」(医歯薬出版)
- (7) ジュークス・ソーヤーズ・ステイラーマン 「発明の源泉」(岩波書店)
- (8) ヴァン・ファンジェ 「創造性の開発」(岩波書店)
- (9) リッター・カルダー 「自然への挑戦」(エンサイクロペディア・ブリタニカ)
(工学部 教授 有機合成化学)

図書館利用法

大学図書館は、大学における教育、研究活動に必要な資料、学術情報等を収集管理し、これらを利用者の要求に応じて、迅速正確に提供することを使命とする奉仕機関であるといわれています。

本館の機能はその点十分とは言えませんが、目下、その整備にささやかな努力を続けております。その一環として今年度からレファレンスの専任職員を配置し、サービス部門の強化に第一歩を踏み出しました。また、それと相俟って、新入生諸君を迎える学年当初にあたり、図書館利用法の周知をはかるため、その概略を述べて、図書館の活用に役立てていただこうと願っています。さらに便覧『学生案内』の「図書館利用案内」の項を併読されると、一層図書館の理解が容易になるかと思えます。

なお、講義等に直接関連をもつ指定図書の利用は、一般図書とは多少違いますから、一括して後述しました。学習効果をあげるために大いに活用して下さい。

〈開館時間及び休館日〉

1. 開館時間

午前9時30分より午後5時まで。但し、土曜日は12時まで。

午前11時30分より午後1時までと午後4時30分以降は閲覧、貸出事務は行なわない。

2. 休館日

日曜日、祝祭日、本学創立記念日（6月1日）、年末年始、その他臨時休館日。

〈入退館〉

1. 入館

入館時には、必ず学生証を携行して下さい。受付で、学生証と引き換えにロッカーの鍵を受け取るとともに、図1の入館票に必要事項を記入して下さい。

館内で使用したい図書は2冊まで持ち込めますから、右欄の図書持込許可票に、その図書の著者・書名等を記入して下さい。

ノート、筆記用具以外はロッカーに納めて下さい。

2. 退館

ロッカー鍵を受付に渡し、その引き換えに学生証を受け取って下さい。その時、貸出図書と持ち込み図書等を提示して下さい。

〈図書の相談〉

研究調査・学習・教養等に必要な図書資料の検索、選択、相談等或いは目録の使用法、その他図書館利用についての問い合わせに対し、係員は積極的にその要望に応じ、協力を致します。

〈蔵書配置〉

本館の蔵書は開架式図書と出納式図書に分かれて、配架されています。（〈図書の利用〉1. b参照）

1. 開架式図書

2階 指定図書閲覧室に13,000冊、3階 参考図書閲覧コーナーに2,000冊、雑誌閲覧コーナーに100種、4階 一般図書閲覧室に18,000冊が配架されています。

(図1)

自由閲覧室 No. _____		図書持込許可票 (2冊を超えてはならない)											
入 館 票		<table border="1"> <thead> <tr> <th>図書記号</th> <th>著者名</th> <th>書名</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> <tr> <td> </td> <td> </td> <td> </td> </tr> </tbody> </table>			図書記号	著者名	書名						
図書記号	著者名				書名								
昭和 年 月 日		静岡大学附属図書館											
学部 学科 学年													
氏名 _____													

2. 出納式図書

書庫、学部・教養部等の資料室（部局図書室はありません）、研究室に備付られています。

〈図書の利用〉

1. 目録組織と図書検索法

a. 目録組織

1) カード目録

(表1)

	和洋書別	目録の種類	検索要素	排 列
本館※1	和書	著者	著・訳・編者※5	A B C順※9
		書名	書名・叢書名※6	A B C順※9
	洋書	分類	主題※7	分類順
旧制静岡高校※2	和書	著者	著 者	五十音順
		分類	主題※8	分類順※9
	洋書	分類	主題※8	分類順※9
旧西部分室	和洋書※4	書名	書名もしくは叢書名	A B C順※9
		分類	主題※7	分類順
旧教育学部	和書	分類	主題※7	分類順

(表2)

※11ガイドカード	※12押 却	図書所在位置	
第一閲覧室	開 架	4階書架	
第二閲覧室		3階書架	
参考図書室	参 考	3階書架	
		指 定	2階書架
			2階書架
(なし)	(無 却)	書 庫	

2) 冊子目録

昭和44年6月以降整理済図書は、新着図書速報でも検索できます。

これは分類順排列です。

b. 図書所在位置の表示

目録には、図書の所在位置が表示してあります。(表2、〈蔵書配置〉参照)

c. 図書検索法

直接書架に向かうのも一法ですが、書庫に所蔵していることがありますから、目録類にも目を通して下さい。この際には次の点に留意して下さい。

(図2)

① 410.1 P 31	② Peano, Giuseppe (1858-1932)
	③ 数の概念について ペアノ著 小野勝次、梅沢敏郎訳・解説
	④ 東京 共立出版 昭和44(1969) 188p 図版 22cm (現代数学の系譜 2)

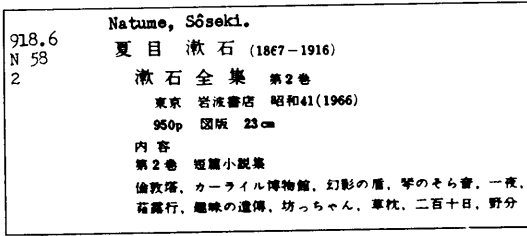
I) 著・訳・編者(例 ⊕ Peano、小野勝次、梅沢敏郎)、書名・叢書名(例 ⊙ 数の概念について ⊖ 現代数学の系譜)、主題(例 ④ 410.1 一数学理論、基礎論)がわかっている場合には、各々著者目録、書名目録、分類目録を調べて下さい。

(図2参照)

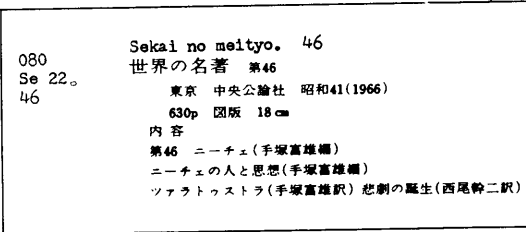
備考

1. 「本館」とは、中央図書館として収集した資料を指す。
2. 旧制静岡高校蔵書は昭和24年出版までの資料だけです。
3. 本館の目録は和書、洋書それぞれ3つに分かれています。
4. 旧西部分室の目録は和洋書混排です。
5. 本館の著者目録は、著・訳・編者をほぼカバーしています。
6. 書名・叢書名は全てをカバーしているわけではありません。
7. 分類位置の確認には「関連索引」を利用して下さい。分類は「日本十進分類法 6版」を使用しています。
8. 旧制静岡高校の分類は、和洋書共に独自のものです。
9. アルファベットは訓令式を採用しています。
10. 外国人名は原則として原綴りですが、ロシア人はローマ字に直してあります。
11. 各カードの前にある三角形のカード。
12. カード右肩に押印。

(図3)



(図4)



Ⅱ) 個人の全集、著作集、選集(以下全集ものと略す)が出版されている場合、各著作については著者で調べて下さい。全集ものに含まれる各著作の書名は書名目録から省かれています。(図3参照)

Ⅲ) 著者多数の図書(例、「世界文学全集」、「世界の名著」)は、全集名で調べて下さい。各著作の書名は書名目録から省かれています。(図4参照)

Ⅳ) 叢書名が書名目録に見当たらない場合には、各書名もしくは、各著者で調べて下さい。

Ⅴ) 著者、編者もしくは執筆者が4人以上の場合、著者目録にあるのは、図書に最初に表示された人だけです。この人が書名で検索して下さい。

2. 閲覧

a. 開架式図書

書架から自由に選択して閲覧できます。閲覧後、図書は元の書架の位置に戻さず、必ず、図書返却台に置くことを厳守して下さい。

雑誌は、閲覧後、正確に元の位置に戻して下さい。

b. 出納式図書

(図5)

目的の図書をカード目録で検索し

図5の図書閲覧票に必要事項を記入の上、出納に申し込んで下さい。

一時に、3冊まで閲覧できます。

請求記号、書名はカード目録のとおり、正確に記入すること。(請求記号は1字でも間違えると、検索に手間取り、又図書が見つからないことがあります。)

図書閲覧票

昭和 年 月 日

請求記号	冊	書名
分類記号	冊	
氏名	学部、学科等	学部 科 学年

静岡大学附属図書館

3. 貸出

貸出するためには、図6の館外貸出証が必要です。早期に写真1葉を添えて申し込み、交付を受けておいて下さい。注意事項を厳守すること。

(図6)

館外貸出証

静岡大学附属図書館

注意事項

氏名

学部 学科

所属

学生番号

現在地

氏名

返却期

1	2	3	4
I			
II			
III			

※ 注意事項

1. 図書を館外へ帯出するときは必ず本証を係員に提出して所定の手続きを行うこと。
1. 本証は他人に転貸してはならない、また紛失したときは速かに届出ること。
1. 館外貸出は7日以内とし、返却を3回遅怠した場合、あるいは延べ21日返却を遅怠した場合には、その年度中館外貸出を停止する。
1. 前項の外本学図書閲覧規定を守ること。

開架式図書、出納式図書（カード目録で検索することは閲覧と同様）も貸出手続きは同じです。図7の貸出票に必要事項を記入し、館外貸出証とともに申し込んで下さい。

貸出冊数は、あらゆる図書・雑誌を含めて二冊までです。（但し、参考図書を含む禁帯出図書、貴重書、最新刊の雑誌は除く）

貸出を受けた時、貸出図書1冊の場合は緑色、二冊の場合は赤色の図書貸出証を手渡されます。この礼は、退館の際、帯出図書と一緒に受付に提示して、貸出証のみ係員に渡して下さい。

(図7)

図書貸出票			
請求記号	著者		
請求記号	書名 誌名・年・巻・号		
	学 部、学 科 等		
貸出月日	返却月日	学 部	科 学 年
返却期限		氏 名	
静岡大学附属図書館			

開架（青色）、出納（赤色）

4. 長期貸出

これは、各季休暇前に行ないます。長い休暇期間を利用しての、学習・読書のために、通常7日間の貸出期限の枠を外して、4冊以内に限り利用して戴くという制度です。図8の図書長期貸出証に貸出を望む図書を記入し、指導教官の印を受けて申し込めば、一定の期日に貸出します。この申し込み時期・方法等については、その都度提示します。

(図8)

請求記号		著者名		書名		登録番号	
分類(記号)	図書(記号)						
指・出・開							
指・出・開							
指・出・開							
指・出・開							
必要なお印を付けて下さい。		期 間 至 昭和 年 月 日 至 昭和 年 月 日	学 部 (部)	学 科 (課程)	学 年	氏 名	
		(氏 名)		(職住所)			

※ は記入しないこと。

(静岡大学附属図書館)

〈図書館利用上の諸注意〉

- 静粛にすること。
- 各階閲覧室の図書はその室で閲覧し、移動させないこと。
- 下駄履きは禁ずる。
- 一時退館の際、受付で鍵を預ります。
- 図書は丁寧に取扱うこと。
- 喫煙は喫煙コーナーで行なうこと。
- ロッカー鍵は受付を通るときその都度提示すること。

※新聞は入館の手続きをしなくても、新聞閲覧室で読めます。

〈指定図書〉

指定図書制度とは、各教官が講義等に関連して、学生に必読を要する図書（試験、演習等の際にはその内容も出題の対象となる）を指定し、図書館はそれらの図書を準備して、学生の利用に供する制度をいいます。

これは大学における教育が、原則として教室内の講義を教室外の自学自習とによってなりたつ単位制教育であり、この教室外の自学自習を効率的に促進するため、指定図書制度を実施し、これによって単位制教育の理念を生かし、教育効果の高揚を目的とすることに由来しています。

1. 指定図書の配置

2階 指定図書閲覧室に日本十進分類法（NDC）の分類順に配架され、開架式を採用しています。

2. 目録

著者・書名・分類目録は一般図書のカード目録に繰り込まれています。その他に、指定図書閲覧室に冊子目録とカード目録（指定教官別と学科別）が備付けてあります。

3. 利用法

閲覧 閲覧者は書架から自由に図書を選択し、利用することができます。閲覧後は一般開架図書と同様に返却台に返して下さい。利用状況把握と配列の乱れを防ぐために、係員が所定の位置に戻します。指定書は室外に持ち出して閲覧しないで下さい。

貸出 館外貸出の場合は、各図書の裏表紙に装備されたブックカードに所定の記入をして、3階出納の係員に館外貸出証と共に提出して下さい。

貸出期限は原則として、3日2冊まで。試験期は貸出を行いません。

■浜松分館利用案内

浜松分館は、浜松市城北3丁目にある工学部、電子工学研究所、工業短期大学の三部局を奉仕対象とする複合分館です。

分館の施設は505m²で、閲覧席100席、書庫延べ328m²、事務室等が含まれています。

運営に当っては、分館長（市川常男教授）を中心として、教官の中から選ばれた6名の図書委員会が組織され、予算編成、図書・雑誌の選択など重要問題が協議されます。

事務職員は7名で、受入・整理・奉仕に携わっています。

また、各系統別に5図書室（機械精密系・電気系・化学系・電子研・短大）が設置され、専門的学術雑誌を中心に閲覧に当たっています。

図書館の開館時間は8時30分から17時（土曜日は12時30分）までですが、火・金曜日は19時まで夜間開館を行い（休暇中を除く）利用者の便宜を図っています。

閲覧の形式は、出納式と開架式の併用ですが、利用の多い理工系新刊書、参考図書（辞典、便覧

類）、新刊雑誌は開架式です。

本学学生は、静岡の本館と同じ閲覧規程に従い、一時に2冊以内で7日間、館外貸出を受けられません。

出納式の場合には、著者名・書名・分類のいずれかの目録カードにより検索して、所定の用紙に記入の上提示して下さい。

著者名目録は、著者名を標目（見出語）とした目録で、著者名のアルファベット順（ロシア語は別置）に配列されています。翻訳書は原著者の原綴りを標目にとり、訳者は副出されています。

分類目録はN・D・C分類法（日本十進分類法）によって分類された目録です。

購入希望図書、図書館の利用等についてお気付きの点があれば、館内投書箱に投書して下さい。

■人事異動

〈本館〉

総務係長	山村秀夫	←本部用度係長
係員	佐塚のぶ	運用係
整理係長	村松正夫	教育学部学生係長
係員	石原良江	運用係
係員	山口柚子	総務係
係員	中島由美子	新採用
係員	石塚美恵子	新採用
運用係長	吉田玲子	整理係長
係員	畠山百合子	整理係
係員	大埜浩一	整理係
係員	島田博明	新採用

—他部局への配置換—

総務係長	伊東正夫	→理学部会計係長
運用係長	杉山秀夫	農学部分館係長
係員	前田行弘	法経短大学務係（図書室）

〈農学部分館〉

分館係長 杉山秀夫 ←本館運用係長

—他部局への配置換—

分館係長 青木文雄 →附属浜松中学校係長

〈浜松分館〉

異動なし